

日時：平成 20（2008）年 7 月 2 日 18:00～20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：視点と日独語の表現 — 翻訳の対照を手がかりに

発表者：成田 節（東京外国語大学外国語学部教授／ドイツ語学）

ドイツ語では(1)の下線部のように知覚者を主語で、知覚対象を対格目的語（あるいは副文）で表すような事態を、日本語では(2)のように知覚者を明示せずに「知覚対象の存在」というパターンで表すことが多い。

- (1) Es bewegte sich mit majestätischer Langsamkeit dahin und Momo erkannte ein ungeheures Pendel, (...). (Michael Ende, Momo)

準逐語訳：それはおごそかにゆったりと動いていきました。そしてモモは巨大な振り子を認めました。

- (2) それはおごそかな、ゆったりした速度で動いているのですが、よく見ると, (...) 大きな大きな振り子でした。（大島かおり訳）

また、日本語で(3)の下線部のように「知覚対象の存在」として表す事態を、ドイツ語では(4)のように、人がある対象に向かう行動として表すという対応も見られる。

- (3) ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。（宮沢賢治「注文の多い料理店」）

- (4) Als sie den Gang entlang weitergingen, kamen sie diesmal an eine hellblau angestrichene Tür. (Johanna Fischer 訳)

準逐語訳：彼らが廊下をさらに歩いて行くと、彼らは今度は水色に塗られた扉の所に来ました。

成田(1995)では主にドイツ語の結合価および格の意味機能との関連で用いられる *Perspektive* の概念について考察し、日本語とドイツ語の構文研究を進める上で視点と注視点の区別が重要であると主張した。その後、いくつかの日本語論に触れる中で、より広い言語現象を説明する枠組みとして「表現主体（≒視座）の位置の違い」という考えに至った。すなわち、ドイツ語では表現主体が事柄の外側に視座を据え、事柄の登場人物（表現主体自身のこともある）からは一定の距離を取って、当該の事柄を表す傾向があるのに対して、日本語では、

表現主体が事柄の内側に視座を据え、事柄の登場人物の何れかに寄り添うようにして、事柄を把握する傾向があるという考え方である。

このように、表現主体がどこに視座を据えるかという違いを基本原理とした場合、ドイツ語と日本語の間に見られる表現パターンの異なりのうち、どのようなケースがこの原理によって説明でき、どのようなケースが説明できないかを、原文と翻訳の比較などを通じて考えた。一部は例示の域にとどまるが、まずは、どのような言語現象がこの原理もとづく考察の対象になり得るかを示すのが発表の趣旨であった。

現時点では、これまで「視座と注視点の区別」によって説明を試みた現象（「構文の明示（ドイツ語）と非明示（日本語）」、「ドイツ語の Passiv と日本語の受身」など）だけでなく、日独語の諸表現に見られる人称制限の違い、日本語における補助動詞（Er hat mich angerufen. — 彼が私に電話を掛けてきた／くれた。）の多用や物語における時制の違い（日本語ではタ形で語られる物語文中で、特に状態描写においてはル形が用いられることがしばしば観察されるが、そのような物語のドイツ語訳では一貫して過去形が用いられている）などもこの原理で説明できるのではないかと考えている。

成田 節（1995）「„Perspektive“の概念について — 構文研究の観点から —」
人文研究（大阪市立大学文学部）第 47 巻第 10 分冊，161-177.